SENSHOJI
YUKARI NEWSLETTER
1994-2026

ゆかり通信
VOL.337
令和８年２月

北海道千歳市清水町1-14　鶴寶山 千正寺
TEL:0123-23-2442 FAX:0123-24-9883
ホームページ http://sensho-ji.net/ フェイスブック @Senshoji

2026年千正寺カレンダー　２月の言葉

皆さんは大晦日はどうお過ごしになられましたか。お寺では毎年除夜の鐘を皆様がつけるように開放しておりますので、よろければ家族一同で撞きに来てくださいませ。

０時からは元旦会法要も勤まり、今年は若院より新年のご挨拶があり、その中で「大悲心（だいひしん）」についてのお話をいただきました。
浄土真宗において大悲心とは、阿弥陀如来が「すべてのいのちを救わずにはおれない」とはたらいてくださるお心です。私たちの善し悪しや、正しさ・間違いを超えて、そのままを抱きとめてくださる無条件の慈悲であります。親鸞聖人は『正信偈』に「大悲無倦常照我（だいひむけんじょうしょうが）」とあらわされ、如来の大悲は休むことなく、常にこの私を照らし続けていると味わわれました。

さて、若院のお話の中で触れられたのが、近年たびたび報道される熊の殺処分の問題です。人里に現れ、人に危害を及ぼす恐れがあるという理由から、やむを得ず熊のいのちが奪われています。人の暮らしと安全を守るためとはいえ、その背景には山の環境変化や人間の生活圏の拡大があり、熊だけを「危険な存在」として切り捨ててよいのか、私たちの胸には重たい問いが残ります。
大悲心に答えを求めるとき、熊の行動もまた「生きるため」であることに気づかされます。餌を求め、居場所を失い、人里へと下りてこざるを得なかった熊の姿は、決して他人事ではありません。私たち人間もまた、自分の都合や恐れを優先し、他のいのちを顧みる余裕を失ってはいないでしょうか。大悲心とは、誰かを裁くための物差しではなく、そうした自らのあり方を深く問い返すはたらきであるように思われます。

親鸞聖人は和讃に「弥陀の大悲の誓願はひとえに凡夫をすくわんと」と詠まれました。凡夫とは、思い通りにいかず、迷い悩み、時に他のいのちを犠牲にしてしまう私たちの姿です。その私を見捨てず、抱きとめてくださるのが阿弥陀如来の大悲心なのです。

熊の殺処分という痛ましい現実を前に、簡単な答えを出すことはできません。しかし、大悲心に遇う者として、すべてのいのちの痛みを自分の問題として受けとめ、せめて「いのちを奪うことの重さ」を忘れずに歩みたいものです。新しい年も、大悲心に包まれて生かされている身であることを深く味わいながら、一日一日を大切に過ごしてまいりましょう。　**（本文：行武秀明法務員）**